

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 3 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370094

研究課題名(和文)ギリシア教父におけるプラトン「洞窟の比喩」の受容史研究

研究課題名(英文) A Study of the Historical Influence of Plato's 'Cave Analogy' on Greek Patristic Thought

研究代表者

土橋 茂樹 (Tsuchihashi, Shigeki)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：80207399

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果としては、プラトンの主著『国家』篇の中でも特によく知られている「洞窟の比喩」の主要モチーフが、アリストテレスからヘレニズム期を経て、初期キリスト教思想にどのような影響を与え、同時にどのような変容を被ったかを、ギリシア哲学とギリシア教父の双方の文献において具体的に検証・考察し得たこと、とりわけ哲人王統治という政治的な文脈で解釈されてきた「洞窟」への帰還(下降)というモチーフが、キリストによる救済論・経綸(オイコノミア)論へと変容していく経緯を詳細に跡付けられたこと、またそれらの成果を国内外において広く公表し得たことが挙げられる。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the influence of Plato's 'cave analogy' and its transformation in the period from Aristotle through the Hellenistic era to the Greek Church Fathers. The essential point of this study is to show how the contrast between the obscure cave under the ground and the sun ruling the dazzling world above the ground has been reinterpreted in the context of the incarnation of Jesus Christ. Some papers have already presented as a part of its results.

研究分野：哲学・思想史

キーワード：西洋思想史 古代ギリシア哲学 教父学

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景としては、もっぱらプラトン『国家』篇に内在的なテキスト研究の観点から為された「洞窟の比喻」解釈に関するもの(以下の(1))と、「洞窟の比喻」の成立にいたる前史および後代におけるその受容史に関するもの(以下の(2))の二種に分けることができる。

(1)個人の魂の正しさがポリスとの類比によって考察される『国家』篇にあっては、同書の主題が理想的な国制を扱う政治的なものであるのか、魂の正義を扱う倫理的なものであるのかという論点が解釈上の最大の問題となっている。

こうした主題解釈上の対立は、当然、「洞窟の比喻」解釈にもその影響が見出される。洞窟から囚人が脱出し、地上世界(すなわちイデア世界)へと上昇する過程は、もっぱら魂の解放という仕方で個人倫理的に解釈されるが、他方、洞窟へ帰還する下降の過程は、哲人王による理想的な統治の実現(の困難さ)という政治的文脈で解釈されるのが常である。さらに、以上のような観点とはまったく異なる言語論・意味論的な観点から、「洞窟の比喻」を一つの思考実験として解するV.Harteらの研究によって、同比喻の留まらない哲学的解釈の可能性も見出されている。

(2)そもそも「洞窟の比喻」がプラトンの創作によるものか、あるいは何らかの伝承によるものかについては議論が分かれるが、罪深い現世を暗闇の洞窟になぞらえ、そこからの解放を光輝な神的世界への上昇として捉えるオルフェウス教的な伝統的図式に、感覚界と知性界という仕方で地下の洞窟と地上の太陽という二元的構図を重ねていったところにプラトンの創見があると言える。

では、こうした「洞窟の比喻」のモチーフは、はたしてキリスト教圏の思想家にも影響を与え、彼らの著作において何らかの力を持ち得たのであろうか。この意味での「洞窟の比喻」のギリシア教父たちによる受容史研究の先鞭をつけたのは、J. M. Dillon, “The Knowledge of God in Origen” (1988)および A. Meredith, SJ, “Plato’s ‘cave’ (*Republic* vii 514a-517e) in Origen, Plotinus, and Gregory of Nyssa” (1991)である。とりわけ Meredith の貢献は、オリゲネスやニュッサのグレゴリオスにおける「洞窟の比喻」の受容の意義を、イエス = 神の下降という観点からの同比喻の救済論的な書き換えにあるとみなす点にある。すなわち、プラトンにおいては、哲学的観想を希求する魂が洞窟から地上へと上昇し、真実在(イデア)を観た後、再び洞窟へと下降するという比喩的道行きに、人間本性の解放と実現の真相がなぞらえられたのだが、グレゴリオスにおいては、暗黒の洞窟と光り輝く太陽との対比は罪深き人間の救済のために神 = 太陽が自ら洞窟へ下降するというキリスト論的救済論へと大胆に書き換

えられていったというのである。しかし、残念ながら思想史上極めて重要なこの示唆は、その後の教父研究において正面切って取り上げられることのないまま今日に至っている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上述のような研究現況を踏まえ、その成果を十分に活用しつつ、従来の「洞窟の比喻」受容史研究における重要な研究課題の看過を補うべく、アリストテレスからヘレニズム期を経てギリシア教父に至る「洞窟の比喻」の受容の実態と、そのことによってその比喻の何がどのように変容されたのかを解明することにある。

具体的には、(1)現世の象徴である洞窟から解放されイデア観想に至るまでの魂の上昇というモチーフが、アリストテレスやヘレニズム期の諸学派及び2~4世紀のギリシア教父を経て、初期キリスト教修道思想の指導的理論となった経緯、(2)哲人王統治という政治的文脈で解釈されてきた洞窟への帰還(下降)というモチーフが、古代末期東方キリスト教圏の教父たちの同比喻の読み換えによって、キリストによる救済論・経緯(オイコノミア)論へと変容していく経緯、以上の2点を本研究は最終的に明らかにするものである。

3. 研究の方法

本研究を進めるにあたっての各年度の計画・方法は以下である。

(1)初年度は『国家』篇第7巻における「洞窟の比喻」を中心的に考察する。具体的には、予備的研究としてポルフェリオスの *De antro nympharum* の読解を通じて新プラトン主義における象徴的、寓意的解釈手法の解明を試みた上で、『国家』篇の主題が政治的か否かという論争が「洞窟の比喻」解釈に与えた影響を主題的に考察する。さらに洞窟から解放されイデア観想という人間本性の完成という完全な状態に至りながら、なぜ、再び不完全な洞窟へと戻らねばならないのか、という洞窟への下降の意義解明を試みられる。

(2)次年度は、古代末期のギリシア哲学および初期ギリシア教父における同比喻の受容の実態をアリストテレス、ケケロ、プロティノス、フィロン、オリゲネスらを中心に文献的に跡づけていく。その上で、砂漠の師父たちやカッパドキア教父らの修道理念に「洞窟の比喻」がどれほど影響を与えていたかを調査研究する。

(3)最終年度は、カッパドキア教父における同比喻の受容と変容を跡付けた上で、以上の成果を総観することによって「洞窟の比喻」の受容と変容に関する思想的展望を開き研究全体を総括すべく、できる限り総合的な理解が得られるように努める。

4. 研究成果

(1)本研究の初年度として以下の3種の研究成果を得た。

予備的考察としてのポルフェリオスの *De antro nympnarum* に関しては、同書における「洞窟」解釈を博士論文のテーマとしている大学院生を、中世哲学会の査読委員の立場から私が指導する機会を得たことで、新たな発見も含め少なからぬ客観的成果を得た。

プラトン『国家』篇に関する研究については、分担研究者として本研究と並行して私が取り組んでいる「プラトン正義論の解釈と受容に関する欧文包括研究」(科学研究費補助金・基盤研究(B)、研究代表:納富信留)の主要メンバーであるプラトン研究の専門家たちとの頻繁になされた研究会や研究合宿において、大いに啓発され、本研究のテーマに関しても、多大な収穫を得た。

以上に加え、私が客員研究員を務めるオーストラリア国立カトリック大学の初期キリスト教研究所の所長ポーリーン・アレン先生をはじめ、研究スタッフとの研究交流において、本研究の意義が高く評価され、また多くの示唆や教示を得られた。

(2)本研究の第2年度として、以下の4種の研究成果を得た。

アレクサンドリア学派における「洞窟の比喻」の受容史研究に関しては、平成25年度に開催された中世哲学会でのシンポジウムに関する報告を26年度刊行の学会誌に纏めるための調査・研究の一環として進めることができ、また、その関連で同学会所属のオリゲネス研究者やフィロン研究者から多くの助言をいただけた。

新プラトン主義関係のテキスト読解に関しては、私が会長を務める新プラトン主義協会に所属する多くの研究者から非常に有益な資料情報や助言をいただき、さらにテキスト読解上の諸疑問の多くに適切な示唆を与えてもらうことができた。

平成26年度に開催されたアジア太平洋教父学会(APECSS)において、各国から集まった多くのギリシア教父研究者たちから、有益かつ生産的な教示を受けた。とりわけ、本研究への各研究者からの反応が非常によいものであったため、これまでの研究方針の正しさを確信することができた。

本研究の補助により同学会のために来日していたブロンウェン・ニール博士による学術講演とセミナーを開催することができた。そこでの議論は非常に有意義なものであり、本研究の進展にも大きく役立つものであった。

(3)本研究の最終年度として、以下の4種の研究成果を得た。

カッパドキア教父における「洞窟の比喻」の受容の実態を、前年度までの成果を踏まえたテキスト研究において跡付けた。ただし、主要なテキストにおいて「洞窟」表象が現れるのは、ニュッサのグレゴリオスのみで

あるので、バシレイオスとナジアンソスのグレゴリオスにおいては、予め方法論的な工夫が必要となった。まず、バシレイオスについては、修道的著作におけるアパテイア(情念からの脱却)を目標とする「上昇」過程と、悲嘆への共感すなわちメトリオパテイア(適度な情念)に動機づけられたキリストの救済という「(神の)降下」過程とを、キリストの神性と人性の両性論的合一によって統合しようとする諸テキストの解明が試みられた。ナジアンソスのグレゴリオスについては、神学の文脈と経綸(オイコノミア)の文脈を区別する箇所での彼の経綸(オイコノミア)と政治支配の関わりを論じるテキスト(『神学講話』)を綿密に読み解き、それをプラトン『国家』およびアリストテレス『政治学』『家政学(オイコノミカ)』と比較考証することで、プラトンの影響がどこまで彼に及んでいたのかを明確化した。

以上を踏まえた上で、ニュッサのグレゴリオスにおける「太陽=神の洞窟への降下」という「洞窟の比喻」の書き換えを、当該テキストにおいて正確に跡付け、その多角的な解釈を試みた。その際、グレゴリオスがプラトン『パイドン』篇の影響を受けて執筆した唯一の対話篇『魂と復活』を並行して詳細に読解することによって、同書で展開される美それ自体(同書ではキリストと同定される)に至る魂の上昇と、イエスの復活及びそれによって終末において人間にも可能とされる「復活」による神の国への上昇、さらにはタボル山でのイエスの変容に根拠づけられた「人間神化」(テオーシス)との哲学的比較考察を参照枠とすることで、前年度までに解明されたギリシア哲学圏における「洞窟の比喻」のモチーフが、どのようにして、また、どこまでキリスト教思想圏における救済論的モチーフへと変容したのかを解明することができた。

前2年度においても、その都度、隣接するテーマごとの総観はなされてきたが、最終年度にあっては、達成された個々の考察結果を「洞窟の比喻のギリシア教父における受容・変容史」という統一的な理解へとさらに鍛え上げていくことができた。具体的には、まず本研究によって考察された全テキストについて、「洞窟」と「太陽」という二つの鍵概念(及びその派生概念)の相互連関とそれが見出される文脈が、ギリシア哲学からギリシア教父思想に至る過程でどのように変移していくかを克明に追跡していった。次いで、単に語義の上での「洞窟」との繋がりにとどまらず、トポロジカルな「上昇」「下降」という思考類型が果たす理念的働きがギリシア哲学からギリシア教父思想に至る過程でどのように変移していくかを調査研究した上で、それらの成果を基に古代末期における哲学・政治学(倫理学)・神学に通底する通時的思想連関の解明がなされた。

以上のすべての研究成果に基づき纏め

られた英語論文 "The Likeness to God and the Imitation of Christ: The Transformation of the Platonic Tradition in Gregory of Nyssa" が高く評価され、平成 27 年度に Brill 社から刊行された論文集 *Christians Shaping Identity from the Roman Empire to Byzantium* に掲載された。その結果、本研究の成果を広く海外の多くの研究者に提供することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

土橋茂樹

「神に似ること」から「キリストに倣うこと」へ ニュッサのグレゴリオスにおけるプラトン主義的伝統の変容、パトリステイカ、査読有、19、2016、9-28

土橋茂樹

東方キリスト教における霊性、東洋学術研究、査読無、175、2015、65-90

土橋茂樹

わたしの生はあなたの生 ポリフォニックな一人称語りとエヒエロギア、パトリステイカ、査読無、18、2015、151-164

土橋茂樹

シュネシオスと夢解釈 (B・ニール「シュネシオスと5世紀アレクサンドリアにおける夢解釈」解題)、パトリステイカ、査読無、18、2015、121-125

土橋茂樹

教父哲学におけるオイコノミア、ニクス、査読無、1、2015、38-50

土橋茂樹

東方世界における自由学芸の諸相、中世思想研究、査読無、56、2014、116-120

[学会発表](計 10 件)

土橋茂樹

東方キリスト教における霊性、東洋哲学研究所例会、2015年7月28日、創価大学(八王子)

土橋茂樹

観想と受肉 ニュッサのグレゴリオスにおけるプラトン主義的伝統の変容、第151回教父研究会、2015年3月28日、上智大学(四谷)

土橋茂樹

思考を理解することと言葉を理解すること、シンポジウム「哲学の方法としての翻訳の意義」、2015年2月28日、東洋大学国際哲学研究センター(白山)

土橋茂樹

Synesius and Dream Interpretation, 第149回教父研究会、2014年9月7日、中央大学駿河台記念館(御茶ノ水)

土橋茂樹

The Resurrection Body in Gregory of Nyssa's *On the Soul and the Resurrection*, 9th Asia-Pacific Early Christian Studies Society, 2014年9月6日、東洋英和大学(横浜)

[図書](計 7 件)

土橋茂樹、他編著

知泉書館、『内在と超越の闘』、2015年

土橋茂樹、他

春風社、『越境する哲学 体系と方法を求めて』、2015年、297-323

土橋茂樹、他

Brill, *Christians Shaping Identity from the Roman Empire to Byzantium*, 2015, 100-116

土橋茂樹、他

世界思想社、『新プラトン主義を学ぶ人のために』、2014年、281-235

土橋茂樹、他(翻訳、訳注、解説)

新世社、『フィロカリア』、2013年、1-154

[その他]

ホームページ等

<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~tsuchi/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

土橋 茂樹 (TSUCHIHASHI SHIGEKI)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：80207399